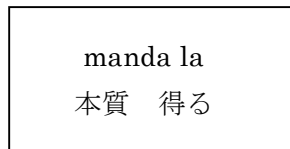


京都大学全学共通少人数セミナー
平成19年度講義ノート

第10回 曼荼羅の思想



本質が存在を帯びると曼荼羅の形をとる。

最高のさとりをうることであり、その場所を意味する。諸仏菩薩のさとりの世界を、一定の方式で網羅し表現している。

<文献4>より

芸術、宗教は認識の手段である。それらは、狭い意味の科学と結び付けられて、はじめて認識という点で全体をなす。

曼荼羅：中心、対称、方位

中心：常に変わらない

対称。方位：個々の曼荼羅によって変わる。

対称：左右対称であるか動的

方位：数が定まっている。その数は曼荼羅による。

円のように方位が無限のものもある。

梵語では、曼荼羅は円や中心を意味。

曼荼羅による治療、瞑想、統合の目的：

人間が自分の方位を定めようとする試みに起源を持つ。

人間は、全体性に向おうとする衝動をもつ。

どんなに文明が進歩しても、われわれは自己の方位決定という根本問題を独力で解決しなければならない。

曼荼羅は、こころの中に普遍的に存在しているので、絶えず建築物や儀式や芸術作品のなかに現れる。

曼荼羅は、同心円をはじめとする同中心の形からなる。異なる次元のあいだの行き来を暗示。

曼荼羅の普遍性は、中心の原理：空間的であるとともに時間的。中心は曼荼羅

のはじまり、この中心が形とプロセスの起源。この中心に永遠がある。それは、知覚される形態を支え、万物の変容のプロセスを統合する構成原理。

「現在」は、意識が一番活動しているときであって、定義できない。なぜなら、時間の中で定義しようとする、現在という瞬間は損なわれてしまうから。それでいて、現在しか存在せず、今後存在するのも、現在だけ。現在の対極である未来と過去は語れる。これは、定義できない永遠の現在があるから。

永遠の現在と自分の中心を現実化することは、同時におこる。

→ 現在に生きていると、その人の存在は曼荼羅のように開いていく。

中心の原理は、「一」であるがそれによって生み出される形とプロセスは「無限」
それは、はじまり（生）でありおわり（死）という両極性

両極性：1つの運動の2つの極端

→ 曼荼羅の観点からすれば、「よい」状況も「わるい」状況も存在しない。
生じるという意味で、どちらも等しい。

自己の経験がどのようなものであれ、平等に受け入れ、消化し、それから得られた教訓を理解することが個人のつとめ

目に見える形になった曼荼羅によって、人は自分の経験を受容できる。

→ ある経験とその対立項との関係が投影されて描かれている一般的図式
ゆえ、対立するものが統一され、別の成長段階がはじまる。

これは、身体の成長につぐ、精神の成長である。

曼荼羅は、どの部分も他の部分と関係があり、他の部分を支えている。

誰もが、自分は自分の曼荼羅を自分自身で作り直さなければならない。

有限と無限：この概念は、曼荼羅が私たちに超えさせようとするものの1つ。

全体であると言うことは、治療されることである。それは、変化すること。つまり、必要なものは吸収し、それ以外は避ける。

統合された全体になるということは、自分の中心と接触しつづけることができること。曼荼羅は、対立するものを結びつける錬金術。

相対性：どんなものでもそれだけでは存在せず、対立項によって規定。

歴史のプロセス自体、1つの曼荼羅：光と闇のドラマが展開

砂曼荼羅の意味：新しく作るためには、以前つくられたものはこわされなければならない。つくってこわす。

<文献1、2>より

曼荼羅の3特性：空間性・複数性・中心性

→ ある時間・空間に1つしか要素がない場合は、原則として曼荼羅とよばない。つまり、異なる価値・思想・機能が共存することが重要。少数であること、また、中心ではなく周辺であるところにも意味を見出す。

学問のパラダイム転換は、中心地からではなく周辺から吹く。

曼荼羅の論理：異なるものは異なるままに互いに補いあって、共に生きる道を探求する論理。

密教（インド仏教の最後の状態）と禅（空海により日本へ、臨済、道元）

密教：在来の仏教諸宗派で崇拝されていた多くの仏（如来、菩薩）をすべてその中に包みいれているばかりでなく、インドの民衆信仰の中に生きていたヒンズー教系の神々をもとりこんだ多神論的包括性のつよい宗派。

禅宗（北宗禅、南宗禅）

北宗禅（すたれた）：修行と悟りを区別、分けて教えてしまうと、悟りばかりに意味があり、そのプロセスとしてしか修行に意味がない。悟りを自分の向うべき目標と考えると、悟りはいわば、主体の向こう側にある客観的な状態とされてしまう。

南宗禅（さかえた）：修行と悟りを一体化、修行それ自体に重要な意味を認める。修行という実践の場において、あくまで主体自身のあり方として悟りというものの意味を理解する態度が重要。

密教に特有の図像として曼荼羅がある。元来、修行の場面で、瞑想の訓練のための道具。自然は人間が支配すべき客体ではなく、心身のすべてをその中に投げ入れて一体化する場である。

瞑想は、男性的なものや女性的なもの、あるいは意識と無意識の統合を意味。

胎蔵界曼荼羅：女性原理、同時性、共生

宇宙のすべての生命の究極の母胎から、仏や神々が現れてくる形を図像として表現。中央に最高位を占める大日如来、その四方に多くの多くの如来、菩薩を描き、周辺には下位の神々や精霊的存在を配置。心理学的には、胎蔵界曼荼羅は無意識の構造を示す見取り図（文献1）。

金剛界曼荼羅：男性原理、経時性

修行を通して大日如来と一体化する心理的过程を表現。（意識化過程）
曼荼羅の双方向性：完成度の高いものほど逆対応がある。固定的にみない。

<文献5>より

曼荼羅はそれ自身の性質によって、対立するものを統一することができるので、もはや分岐や衝突は存在せず、お互いに補い合って生命に意味深い形態を与える。このことが一度経験されると、創造神の中の両価性が困難をもたらすことがなくなってしまう。むしろ、逆に対立物にたいする創造的な対決として理解することができ、対立物を自己の全体性の中に統合して理解できる。

自然および無意識には、無数の知識があるように思われる。時が熟したときのみ、意識によって理解。この世においてのみ、対立物が衝突し、意識の水準をあげる。これが、生者の強み。

人は、極限のものー「自己」ーと結ばれているときのみ、無意識の無限性と結びつきを形成。そのとき、人は**限定**されたものであると同時に**永遠**のものとして経験。

↓

一回限りの歴史性を意識することは、自分自身を知ること。他者には、生じない自分だけの本質をすること。これが**個性化過程**。このとき、無意識の無限性への感情が形成される。

<文献6>より

自己というものは、われわれが当面する状態のいかなる場合にもその状態の中心に位置するもの。だから、この自己が徹底的に知られていないと、さまざまな疑問がわれわれをなやます。

<文献5>より

捨てなくてはならないのは、知覚される世界ではなく、それについてのわれわれの感情や思想である。

文献

- 1) 湯浅泰雄『身体の宇宙性』岩波書店
- 2) 鶴見和子、頼富本宏『曼荼羅の思想』藤原書店
- 3) C.G.ユング『個性化とマンダラ』みすず書房
- 4) ホセ&ミリアム・アークエイエス『マンダラ』青土社
- 5) C.G.ユング『ユング自伝』みすず書房
- 6) 鈴木大拙『禅と精神分析』創元社